

オブローモフの生涯より (1979)

A FEW DAYS OF I. I. OBLOMOV'S LIFE

НЕСКОЛЬКО АНЕЙ ЧЗ ЖЧЗНЧ И. И. ОБЛОМОВА

メディア 映画

ジャンル ドラマ

製作国 ソ連

時間 140分

初公開日 1981/04

公開情報 日本海

【解説】

冒頭、部屋にさし込んだ眩い朝日に目覚める主人公の少年時代の挿話が忘れ難い、ミハルコフの光溢れる小市民劇の傑作だ。

ペテルブルグのぼろアパートに住む貴族のなれの果てイリヤ・オブローモフは30すぎの10等書記官。12年前この町に現れた時は希望にみちた青年だったが、今や人生にくたびれ、薄汚れた部屋でただ惰眠を貪る生活に従者のザハールも呆れ顔だ。そんな彼を慕う後輩アレクセイエフ。そして、共に田舎の邸で育った親友シトリツが欧州留学から帰り彼と同居する。“今しかない”が口癖で役所勤めから事業を起こして成功したシトリツに尻を叩かれ、イリヤもあれこれ会合やパーティに顔を出す。彼に合わせて朝飯も野菜のみのダイエット食。が、それも長くは続かない。サウナ風呂で兄貴風を吹かずシトリツに怒り、そして、しみじみと自分の無力さを述懐するイリアに逆にシトリツは感激してしまう。“他人など走り回らせておけばいい”君は君だ、と。

そして再び欧州に発つことになったシトリツは彼の面倒を女友達のオリガ（「愛の奴隷」でも素敵だったソロヴェイ）に頼む。彼女の叔母の別荘で数週間を過ごしてシトリツを追ってパリに出るはずだったイリヤだが、そののどかな生活を気に入り、オリガに魅かれていたこともあってそのまま居残る。どうしようもない愚図だが根は善良で哲学者（自分を一枚の木の葉に喩える台詞は感動的）のイリヤをオリガも好きになる。しかし、その好意に戸惑う臆病なイリヤ（愛を告白された嵐の一夜を、一人、彼女の部屋の見えるバルコニーで待つ場面が印象的）は結局、帰国したシトリツに彼女を譲ってしまうのだった……。

エピローグ。結局子持ちの未亡人と結婚して早逝したイリヤの息子は子供のないシトリツ夫妻の養子となっている。二人の仲が冷え切っていることはさり気ない描写で分かる。そして女中が少年を呼ぶ。“お母さんが見えましたよ”。実母に少しでも早く会おうと駆け出す少年の姿を延々と追って映画は終わる。ロシアの夏の風景の美しさが目に沁み、前世紀の人々のナイーヴさに心洗われる。

【クレジット】

監督	ニキータ・ミハルコフ	Nikita Mikhalkov
原作	イヴァン・ゴンチャロフ	
脚本	アレクサンドル・アダバシヤン	Aleksandr Adabashyan
	ニキータ・ミハルコフ	Nikita Mikhalkov
撮影	パーヴェル・レーベシエフ	Pavel Lebeshev
音楽	エドゥアルド・アルテミエフ	Eduard Artemyev
出演	オレーグ・タバコフ	Oleg Tabakov
	エレナ・ソロヴェイ	Elena Solovei
	ユーリー・ボガトイリヨフ	Yurii Bogatylyov
	アンドレイ・ポポフ	Andrei Popov
	エフゲニー・スプチェロフ	

エフゲニヤ・グルシェンコ
オレーグ・バシラシヴィリ
ニコライ・ブルリャーエフ

Evgeniya Glushenko
Oleg Basilashvili
Nikolai Burlyaev